

ネップと農村コムニスト¹

NEP and Rural Communists

ロシア研究所

招聘研究員 奥田 央

要 旨

1921年のネップの導入は、農村コムニストに複雑な影響を与えたが、徴税をはじめ多くの局面で農民に対する権力的な関係は依然として維持された。1924年10月の党中央委員会総会は、農村に対する党の関係を全面的に見直し、恣意的でときに暴力的であった要因を取り除くことを要求した。それは、1924-25年の冬から本格化した。ソヴェト選挙の多くの部分がやりなおされ、次いで農村の市場経済の発展を妨害する多くの要因が取り除かれた。農村コムニスト（党員と党員候補）は非難の対象となった。この非難は、現場のコムニストにとっては思いがけないもので、彼らのあいだには当惑と不満が広がった。当時、ブハーリンは、1921年のネップへの移行の時期の危機以来、2度目の農村党組織の危機であると把握した。党はまもなく1926-1927年には農村の内部で貧農を組織してクラーク層を孤立させる政策へ、事実上、階級闘争を人為的に強化する方向へ力点をシフトさせた。そこでは、コムニストがもっとも重要な役割を果たすことになる。

本稿ではさらに、農村社会におけるコムニストの状況、その農民との関係についても分析の対象とする。彼らは、都市から派遣された者も、農村のなかで経上がった者も有給の職を求め独占した。一方、農民は、コムニストに対して、二重の意識、すなわち、モスクワ中央に対しては漠然とした敬意を、地元のコムニストに対しては不信と敵意を抱いていた。これらすべてが集団化の歴史的前提を形成していた。

なお、本稿ではいくつかの風刺画を行論に沿う形で紹介したい。革命の激動が去ったこの時期に、現在もつづいている著名な風刺雑誌『鰐』以外にも、多くの雑誌がソ連全土で刊行されていたことはあまり知られていない。そのいくつかは、1920年代中頃という特別な状況のなかで刊行され、まもなく廃刊となった。

キーワード

ネップ レーニン スターリン 農民 コムニスト 集団化 風刺画

英文要旨

Despite the proclamation of NEP in 1921, the arbitrary and violent approach to ruling the peasantry still continued to exist in the countryside. The October Plenum (1924) of the Central Committee of the Russian Communist Party decided to remove the remaining elements of "War Communism." This decision was fully implemented beginning in the winter of 1924-1925. Local rural Communists who occupied administrative posts became the target of criticism. The abrupt change in tactics of the Party and government authorities either bewildered or dissatisfied rural Communists. The Party's policy was soon replaced in 1926-1927 by the deliberate intensification of class struggle within the peasantry. This new approach formed the background of the collectivization of agriculture in which local rural Communists played the most active role. This article intends to examine the dual structure of sentiments that the Russian peasants had toward the Communists: ambiguous respect for the Center (Moscow) on the one hand, and distrust and antipathy toward the local rural

Communists on the other.

The article utilizes cartoons in Soviet satirical journals in the 1920s. Little is known about these sources, except for *Krokodil*, which is still being published. Some of them ceased publication after the short period of the mid-1920s that is the focus of this article.

1. ネップとレーニン——はしがきにかえて

1921年春に新経済政策が導入されたあと、レーニンは、そのときを振りかえりながら、「党内にはいかなる動揺もなく」「全員一致で」それが採択されたと何度か公式の席で発言した（レーニン(33): 91, 269-270）。この発言に対して、「レーニンは様々な判断から嘘をいったのであり、党内にはネップの採択にいかなる合意もなかった」、とのちに指摘したのは、1920年代に『商工業新聞』の編集部にいたニコライ・ヴァレンチーノフである（*Валентинов*: 28-31）。古い著作であるが、これを利用することからはじめよう。

論拠はすべて彼の個人的な会話であり、ひとつは、一時期ヴァレンチーノフと同じ新聞編集部にいたペ・ムラビヨーフとの会話である。ムラビヨーフは、資本主義が一掃され、貨幣の価値がなくなり、お伽噺のように平等の社会があらわれるのだと本当に夢を抱いてきた。呪うべき過去の間接関係を蘇らせたネップは、彼にとっては、「共産主義への裏切り」以外の何ものでもなかった。彼は、その夢を失ったために、以前飲まなかった酒に溺れはじめたと告白し、このように苦しむコムニスト²が非常に多いと語った。ヴァレンチーノフによれば、ムラビヨーフは「中農」の、すなわち平均的なコムニストであった。実際、ネップの導入にともなう理想的理由での自殺は非常に多く、党中央委員会のヤロスラフスキーもこの事実を認めている（*Партийная этика*: 194）³。

もうひとつは⁴、当時、食糧人民委員部の要職にあったア・スヴィデェルスキーが語ったものである。それによると、或る集まりで（何の集まりかスヴィデェルスキーはいわなかったし、ヴァレ

ンチーノフも訊かなかった）、レーニンに完全に同意したのはエリ・クラーシンとア・ツュルーパーだけであり、他のものは沈黙したか、あるいは受け入れようとしなかった。レーニンは、彼を支持しない者に対して、人民委員会議長と政治局員の職を辞すると脅して、無理やりに同意を取り付けた（なお、外国貿易の分野で豊富な経験をもつクラーシンと、国内の穀物問題に精通したツュルーパーの支持があったことは、レーニンの心強い支えであったと評価することもできる）。

ついでに、ヴァレンチーノフの回想によれば、ブハーリンは、「24分で」ネップの反対者から熱烈な擁護者になったばかりでなく、ネップ擁護の論拠を何倍にも拡大した。この過大な受けとめ方にレーニンは批判的であった、とスヴィデェルスキーは語った。

新しい政策に対する反対者は、トップの指導者だけではなく、もっと下部のコムニストのなかにも数多く存在した。のち1925年のジノヴィエフの回顧によれば、ネップの導入の時期には、労働者は嫌疑をもってそれを迎え、党の周辺にも「ネップとはプロレタリアートの新しい搾取（новая эксплуатация пролетариата [いわば「ネップ」]）のことである」という者がいた（*Беднога*, 3/VII-1925）。

農村でも事態は深刻であった。1920年代初頭の党の危機には、農民とコムニストとのその関係や、飢餓に代表されるコムニストの生活そのものに関連する事態が作用していた。これらの困難は構造的なものであり、ロシア社会の全局面を覆っていた危機であった。生活の困難から農業へ専念しなければならぬコムニストは党を離れた。

他方、内戦のあとには共産主義がくると信じていたコムニストもいた。彼らを襲ったのは何より

もまず茫然自失であった。1922年2月の『プラウダ』紙によれば、「新経済政策については、大半のコムニストの有様は何か茫然とした状態であった。どこへいくのか、そもそもいくところへいきつけるのかどうかもはっきりしなかった」(Никулин: 61)。

政策転換に際する党の当面の問題としては、党の大義にかかわる理念的な問題は著しく重大であった。たとえば、サマーラ県の党指導部は、1921年末に、郡の地区の党委員会への秘密通達を送り、離党するすべてのケースを注意深く監視するように要求した。指導部の警戒心を引きおこしたのは、「原則的な」コムニスト、すなわちネップを受け入れないという理由で党を離れるコムニストであり、そのリストを定期的に郡委員会に送るよう指示した(Мякотин: 48-49)。これらの人々のなかには、意識的に反党的な立場に移行する者がふくまれうると判断されたからである。実際、その後、1920年代の農民の様々な抗議行動には離党した「旧党员」が参加する例が見られた。

ネップの変化に対する失望や反発よりもはるかに強かったのは、戦時共産主義期に身についた観点の持続力であった。そもそもレーニン自身が、過去の惰性を引きずっていた。1921年秋に、「商品交換」(都市と農村が現物で生産物を交換すること)を目的としてきたそれまでの政策が失敗に帰し、「ふつうの商業が生まれた」とレーニンが認めた(レーニン(33): 84)ことはよく知られている。しかし、それにつづけて彼は、「商業的原則への移行」は「正しい商品交換」がもたらされるために必要なのである」と述べ、「商業的原則」がそこへの「回り道」であることを明言した。いかえれば、ネップにはいつレーニンが強調した「回り道」や「媒介」、「過渡」といった表現そのものが、「商品交換」「生産物交換」という彼の不動の最終理念を示していた。彼は「だが結局は、われわれがめざしている目標に達するであろう」と語った(レーニン(33): 94-95)。

1922年1-2月の「政論家の覚書」の執筆計画

には次のような一節がある。レーニン自身の書き物としては「生産物交換」への最後の言及ではないかと推定される。「||NB: 社会主義経済の基礎が据えられたとみなしうるのはいつか。農民との生産物交換が確保されたとき。農民が経済的に満たされたとき!!」(Ленин(44): 502-503 強調は原文。以下、特記がないかぎり傍点は引用者のもの)。いかえれば、1921年秋に「商品交換」の失敗が明らかになるとともに、レーニンのそれへの固執はますます度を強くしていったというべきである⁵。

それでは、それまでの時期は、「回り道」の期間はどれくらいなのか。オシンスキーが「ネップ——真剣に、長期間」を25年と想定したことに對して、1921年5月、レーニンは、「5年から10年にならないものか」と語った(Ленин(43): 330)⁶。しかしいっそうあとの時期にはレーニンは、ロシアの「文化革命」を成就するには「歴史的な一時代」を要するとも考えた。最晩年のレーニンは、ロシアの後進性に対する考えをあれこれと巡らせたのであろう(奥田1979: 81-83)。

しかし、この「回り道」の時期においてすら、場合によっては古い形態に戻ることがありうると党は認めていた。割当徴発を食糧税にかえた第10回党大会決議そのものが、「党は、必要な場合に、戦闘的指令のシステム(система боевых приказов)へ移行できるだけの十分な柔軟性をもたなければならない」と断言していた(КПСС(2): 327)。ボリシェヴィキ権力の維持はすべての議論の前提だったからである。

2. 過去の重石

農村のコムニストのなかでは、戦時共産主義からの惰性という問題は深刻な現実性をもっていた。戦時共産主義期における農民の最大の体験は強制的な穀物徴発であった⁷。穀物(それは種子でもある)は農民の生存の源泉であり、同時に家畜とならぶ彼の富であった。コムニストが戦時共産主義期にその徴発に個人的に参加したというこ

の一事が、農民のコムニストに対する態度を根本的に決定していた。それを奪うことは農民によって盗み、暴力と見なされた。そこでは、全般的なごろつき行為が誘発され、それに適した人々がそこに集まり、つくりだされた。1921年1月のトムスク郡警察宛の警察の文書は、党に対する農民の敵対的態度の原因は党細胞そのものにあり、そこには「質^{たち}の悪い、『ルンペン・プロレタリア』分子の大多数」が入り込んでいると指摘した（Из истории земли: 137）。

ボリシェヴィキはプロレタリアートの党であるにもかかわらず、革命後の農村には、もとより近代的な農業プロレタリアートは存在しておらず、ソフホーズの農業労働者もまだとるにたりなかった。一般の農民は地主の土地を均等的原則で獲得したばかりであり、全般的な経済的逼迫のなかで階層分化はまだ現実的な意義をもっていなかった。こうして貧農、極貧農をプロレタリアートに準じて考えるボリシェヴィキが、都市や農村に滞留する、ルンペン的な、農村にとっては周縁的な分子と結びつくことは不可避であった。

農村コムニストのなかの「ルンペン的」な、すなわち非農民的な特質をもつ人々（その程度や割合は全く不明であるが）は、ときに断定的に語られた。農村党細胞の主要な部分は1918-1920年の内戦の時期に入党した人々であり、農村コムニストの原型はこのときに生まれた。さらに、その基本的な部分は、国内戦と干渉戦争のために党勢力の拡大が緊急に必要とされた1919年秋の「党週間」（партийная неделя）の時期に形成された。このときの入党には、党規約が要求した推薦状が要求されなかった。

一大国内戦に発展することになるタンボフ県の農民反乱の前夜、エス・エル党のタンボフ組織は、「党週間」の時期におけるボリシェヴィキの大量入党と質の劣化に着目していた。エス・エル党中央委員会宛てのその報告書（1920年）によれば、タンボフ県では1920年1月1日現在のボリシェヴィキ党員の3分の2が1919年11月～12月の「党

週間」の時期に入党した。このとき、入党を望んだすべての労働者、農民はいかなる推薦も受けずに入党した（入党したメンバーのおよそ半分ははやくも除名されていた）。

報告書はその結果を厳しく評価した。「十把ひとからげに——しばしば無理矢理に——党への引き入れがおこなわれたために、名称上プロレタリア的であった党は、事実上、犯罪的な分子の混じった『ルンペン・プロレタリア的』党に転化した」。さらに、コムニストは飢餓のさなかに特権をうけており、報告者の個人的な目撃証言によれば、都市の公共食堂で食事を受けられる配給切符は、職業にかかわりなくコムニスト全員が第1カテゴリーであった（Крестьянское восстание: 51）。

1920年代に共産党中央委員会機関紙『貧農』の農村通信員であったゲオルギー・スメルドフ⁸は、1919年夏（秋？）のヴァトカ農村の出来事を詳しく記憶していた。彼は、その当時、同県ダロフスコイ郷執行委員会の書記であった。

スメルドフの回想によれば、1919年の夏、コテリニチ市から、ダロフスコイ郷にやってきたチスチャコフ某は、郷執行委員会のメンバーを集めて、党員ではないメンバーに対して（党員は2、3名であった）「明日までに」入党しなければ、職を解任して逮捕すると脅迫した。翌日、2、3名がくわわったが、残りの者に対して「1週間後には必ず落としてやる」と言い放った。これは、ヴァトカ県ダロフスコイ郷にはじめて党細胞が発生した時のことである。「過去の党——その下部の枝、郷細胞——は、無秩序に、いっしょくたに、しばしば無理矢理にさえつくられ、そこには、政治意識の低いものだけではなく、ただ質^{たち}の悪い、今風にいえば許し難い分子が入り込んでいた」（Беднота. 28/X-1924）。

農村での恣意的な関係は止むことがなかった。国内戦の時期に、コムニストは、農民の抵抗に対して非常権力機関が採用する様々な措置に参加し、無制限の権力をあたえられた。そのため、彼らは農民との関係をすべて力づくで解決する習慣

が身につけていた。1920年代の農村の現場においても、何の公的な権限ももたない党書記が、農村の任意の施設で、農民のいる任意の場所で、家宅搜索をおこない、押収し、逮捕しても咎められることはなかった。

1921年の党の粛清は、1917年10月以降にボリシェヴィキに入党した旧他党员、旧体制の官僚、ソヴェト権力のもとで特権をもつ職につくものなどを対象としたものであり、労働者、農民に対する点検は最小限とされていた。したがって粛清によって最下部の「質の悪い」分子が急減したと考えることは困難である。経済・社会状況の全般的な好転と農民に対する収奪的行為の停止だけが、それを可能にしたであろう。自分の農業経営によって生存を維持しようとする人々は、党活動と両立させることができずに離党した。党中央も農村へ関心を向ける余裕を失っていた。

当時の資料でしばしばあらわれる指摘は、農村コムニストには良質の分子がいたが、ほんの少数の悪質な分子がいれば、農民は後者に代表させて組織全体を理解したということである。この場合、農民が発する「コムニスト」という言葉自体が悪意をふくんでいた。

たとえ「犯罪的」でなくとも、農業を放棄し、家をあばらやにしているコムニストは農民にとってはルンペン的であった。1925年にはそれが「中央委員会資料」の名で語られた。資料は、新規加入者のなかに、純粹の農業者が少なく、農業よりも社会的な仕事により多くの関心を向けているもの、そして「ルンペン農民的な分子」が、一定の、地域によってはかなり大きな割合を占めている、と明確に断定した。「彼らは、経営に従事はしていても、それと強く結びついているとは感じていない。彼らに対して、大抵、農村では怠け者(лодырь)という声が聞こえてくる」(M. X.:206)。党の隊列に「ルンペン的な分子」が相当数ふくまれているという指摘は、党中央委員会の機関誌ではまれなことである(第一、『共産党宣言』によると、ルンペンは反動勢力になりがちなのである)。

農民との関係においてとりわけ課税をめぐる情勢がつねに険悪であった。1921年から1923年までの現物税の徴収が農村の現場において戦時共産主義期の穀物徴発とあまり変化がなかったことは注意しなければならない。重要な穀物地帯における1921-22年の飢饉の惨禍は、飢饉の地方へ食糧援助を強要されたその他の地方へと版図を拡大した。飢饉の影響は、翌年にもつづき、『貧農』紙はその後遺症について報じつづけた。食糧税は多くのしかかって徴発より過酷な地方も多く、それ以外にも数多くの現物の賦課(薪、荷馬車運輸、燃料など)、さらに諸種の貨幣新税もくわわっていた。1923年7月まで、かつての穀物徴発の担当機関である食糧人民委員部が存在し、同様の方法で食糧税を徴収していたことはその象徴である。食糧人民委員部は農村への対処能力を保存していたからである。

1923年3月、第13回ヴォローネジ県党協議会は、「コムニストは、不幸なネップはいつ廃棄されるか、と問題を立てている。これまでネップは、コムニズムへの移行に必要な息継ぎとは見なされずに、警察と貧農委員会によって闘わなければならない悪と見なされている」と認めた。ネップ移行後の2年を経ても、ここでは農民に対する粗野な言葉遣い、粗野な税の取り立て、殴打、銃殺が記録されていた(Никитин: 61-62)。

1924年のはじめに税は貨幣税へ完全に移行したが、それでも情勢は改善されなかった。それどころか1924年は大旱魃の年であった。税の徴発部隊が組織され、不払いに対しては資産の差押え、諸種の農業サービス施設、病院、山林区の利用の禁止、都市への通行の禁止、罰金の賦課等々、地域によってそれぞれ様々な措置が講じられた。資産差押えを目的とした納屋の扉や長持ちの破壊などの暴力行為は以前の状況のくりかえしであった(«Совершенно секретно»: 262)。

前出のスメルドフは、党は「反党分子」と呼ばれたものと「決してまだ無縁ではない」、と断定した。「現在のコムニストは、住民とのあいだに

生まれた平坦でない、ぎくしゃくした関係を解決することになった。しかしそれはとても難しい。農村は、党員に近づきながら、しばしば過去を振り返っているからである」。

スメルドフの生の一文が共産党の機関紙に無傷で生き残った。「役人と官僚のコムニストを農村は憎悪しているものであり、率直に言えば、ヤマナラシの枝ならどんなものにも彼らの首をつるしてやる用意ができていのである」(ヤマナラシは、キリストを裏切ったユダが首を吊って自殺した木だとされている)。

コムニストの暴力行為は、たんに国内戦の時期からの惰性ではなく、権力と結合してはやくも固有の相貌を備えつつあった。1925年に党中央委員会の扇動宣伝部で講義をした人物(人物名は不明)は、次のように指摘した。「最近の多くのわが同志、若いコムニストにはこんな観念がある。入党した、党員証を受けとった、いわば、『塗油式を受けた』〔洗礼、即位の儀式を受けた〕、だからいまや『神の恵み』を上から受けた、だから命令することができる、経営を指導できる、何にでもとりかかることができる、うまくやり仰せることができる、と。こうして彼らは行政的引き回しへ引きよせられているのである」(ГАРФ. Р-1235/103/84/49-50)。

しかしまもなく農村コムニストに対して、過去の遺物を取り払えという命令が上からきた。

ここに1枚の風刺画がある(【画1】)。

——通り全体が逮捕されたとは、どうしたことだ？

——議長が、村全体が反革命者だといって一網打尽にしたのだ。

——逮捕されて連行されていくのは誰だ？

——議長自身だ。都市からやってきた彼本人が反革命者だとわかったのだ。

当時の風刺画には、筆者にどうしても理解できないものがあることがまれではない。未来の芸術アカデミー会員であるミハイール・チェレムイフが1925年4月、レニングラードの風刺雑誌『河馬』

に寄稿したこの作品は、筆者にとっては、本稿のような長い「回り道」を要した。これは、農民を弾圧していた「都市からの」地方指導者が今度は逆に弾圧されたという状況を描いたものである。



【画1】「ふたつの観点」

Бегемот. Л., 1925. № 15 (апрель). С. 3.

「通り全体の逮捕」とは農民への弾圧を指す。そのキャプションには、「郷の活動家のなかには、郷の住民の95%を反革命者と見なしているものがある(『プラウダ』から)」とある。たしかに1925年2月25日の『プラウダ』には、タンボフ県のいくつかの郷で98%の農民が反革命者だと見なされているという記事が出ていた。

農民の弾圧者が弾圧されたことについては、6月にスターリンは、「ご存じの通り、このために〔無規律、無法、恣意〕のゆえに」多くの郷執行

委員会議長と党細胞のメンバーが監獄行きとなった」と、大学の学生を前に語った（Правда, 25/VI-1925）。この一行は、戦後刊行されたスターリンの著作集では（したがって邦訳でも）演説のなかから削除されており、読めなくなっている（Сталин (7): 184）。スターリンが語っている「郷執行委員会議長と党細胞メンバー」は画でいわれている「議長」に相当する。すなわち、スターリン自身のこの発言が、この画が語る顛末の存在を証明しているのである。

それは1924年末から1925年にかけておこった。もとより個々の党活動家の不法な行為は、それ以前から摘発の対象とされていたが、このとき党は、下部の活動家、指導者に戦時共産主義の残滓を取り除くことを要求し、農民の下からのイニシアチヴを尊重するといういわば真のネップの宣言を発した。

スターリンは1925年1月に、われわれ自身への批判を許さなければ、農民からクロンシュタット、タンボフ、グルジアのような「蜂起による批判」を受けることになるかと何度か語った（Сталин (7): 22, 31）。それは多分に「ガス抜き」の効果を狙ったものともいえよう。いずれにしてもそれは下部のコムニストにとっては突然の出来事、農民との立場の逆転であった。

しかし【画1】にある「都市からやってきた議長」については、なお説明が必要である。この風刺画については、本稿の全体を総括する際にもう一度立ちかえらなければならない。

3. 都市と農村

コムニストの都市集中的な性格を、1927年党センサスの結果によっても確認しておこう。それによれば、農村コムニストが直接に住民を管轄できたのは、（1党組織が5、6村を管轄できると仮定して）農村全体では4分の1ないし5分の1の居住地にすぎなかった。数字を補足すれば、ソ連全体で居住地は54万7,000、農村の細胞と候補者

グループは合計約2万1,000（それぞれ1万7,500と3,400）、コムニストは総計30万7,000であった。こうして、集団化前夜の系統的なセンサスによっても、全居住地の4分の3ないし5分の4は、農村党組織が直接に管轄できる範囲の外にあった（Климин: 136より）。

党の観点から見た農村統治の欠陥を克服する努力は1920年代の初頭からはじめられていた。その努力にはいくつかの形態があった。

第1は、何らかの特定のキャンペーンに際して農村に強い働きかけが必要とされるときに、それを成功させるために臨時的に責任者を派遣する方法であった。この責任者は全権（уполномоченные）という名称で呼ばれた。国内戦の時期にそれは広汎に活用された。食糧税の徴収（穀物調達）にも全権のシステムが機能していた。1920年代には、県や郡の行政機関が選挙キャンペーンにおいて郷や村に派遣した選挙全権が、その主要なものである。行政機関とはいっても、その背後に党委員会や、内部の党フラクションなどの党組織が直接に影響をあたえていた。彼らは、郷ソヴェト大会や村ソヴェトでの選挙の実施に責任を負っていた。党組織が予定した候補者リストを選挙集会で通すための圧力、ときには選挙キャンペーンに有害な分子の逮捕など、全権による強権の発動は持続していた（奥田 2016: 66-67）。限られた数の彼らは多くの村を把握しなければならず、その訪問のせわしなさ、「旅巡業的な」性格は当初から指摘され、批判の対象となっていた。

1928年以降には、責任者を派遣する制度は、ふたたび穀物調達、さらに自己課税、徴税といった経済的なキャンペーンの遂行にも適用された。末端ではしばしば同一人物が複数のキャンペーンを担当した。1927/28農業年度にはじまった穀物危機は、穀物輸出と都市経済に直接に悪影響を与え、工業化計画を頓挫させる危険があったため、農村へ派遣される全権の活動は緊急性と特別な重要性を帯びた。彼らは実際に、処罰し大赦する無制限の全権をもち、委任状を所持していた（Сапунов: 110）。

当然ながらキャンペーンが緊急性、重大性を帯びれば彼らの短期的な行動は暴力性を増し、さらにその人数自体が増加した⁹。あらゆるレベルと分野で上級機関から下級機関への全権のシステムがつくりだされ、彼らは、成功の名誉と失敗の非難を受けた。怠慢の誹りは逮捕にもつながった。全権の派遣は1930年代初頭には急襲的な特徴を帯び、集団化と穀物調達のカンパーンの絶頂期には、地元で本来活動すべき機関（たとえば村ソヴェト、ときには郷執行委員会でさえ、さらにその周辺の社会組織も）を押し退け無力化した（【画2】）。それらは全権に従属する道具となるか、役に立たなければ解散させられた。



【画2】全権

На советскому посту. Новосибирск, 1930. № 11 (июнь). С.5.

しかしそれは日常では——1930年代の農村では「日常」となった——つねに「旅巡業的な」性格を拭いきれなかった。そのことは全権による農村支配の限界をも示唆していた。タンボフ農村の村ソヴェト書記であった人物の回想が残されている。彼の村は、司法機関からの全権が担当していた。村にこの全権があらわれることは村人に恐れられていた。全権が馬に乗って村ソヴェトにあらわれるのは、週にわずか一度であり、すぐに仕事で立ち去った。たしかにこの地区の全権は「村の絶対的な権力をもつ指導者」であった。「しかし、彼の権力はエピソード的なものであり、村人の日常生活に現実的な影響をあたえるにはあま

りにも威嚇的であった」（Многоукладная аграрная экономика: 35）。

第2に、上級の行政機関は指導員（инструкторы）の制度をもっていた。「指導員は、執行委員会の目であり、耳である」がその役割の特徴づけであり、下部の、たとえば村ソヴェトの状況を的確に把握し、情報を上級機関に与えることを任務とした（なお指導員のシステムは党のラインにも同様に存在した）。これも基本的に党員によって構成されていた。1927年7月1日のロシア共和国については平均して、地方、州、県の執行委員会、自治共和国中央執行委員会に各3－4名、管区に各2－3名、郡（209）に計424名、平均して2名いた。もっとも重要な情報源をあたえる郡レベルに2名であったことは、そのうち1名を部長として郡に残すとすれば、たった1名でひとつの郡を「放浪する」ことを意味した。

郡の指導員の4分の3がコムニストであった。全員がコムニストであることが望ましいとされており、それが実現されないのは適切なコムニストを見いだす困難を物語っていた。指導員がその職についている期間は（全権より長いとはいえ）、半分以上（56%）が1年未満で、その多く部分が半年に満たなかった（А. С.: 13-14）。

1920年代中頃の批判的な精神をみなぎらせていたヤ・ブーロフは、この指導員の制度を『ブラウダ』紙上で徹底的にこきおろした。——指導員は、都市から郷や村にやってくる。ソヴェトのプロトコル、計画、活動予定など書類に飛びつく。生きた人々、事実、現実には全く興味がない。2時間ほど書類に熱中して、とどまることなく去っていく。「旅巡業的」で、ふいにあらわれる彼の特質は、下部アパラートを悩ませるだけで、具体的な、役立つ指示を全くあたえない。彼は、下部のソヴェトや党のアパラートに、書類や形式を重視する心だけを育む、と（Правда. 8/II-1927）。

全権が出張費を支給される臨時の任務であったのに対して、指導員はひとつの職として給料を支給されていた。指導員が集団化前夜に予算削減の

対象とされたことは、彼らが全権ほどには重視されていなかったことを推定させる。まもなく集団化の時期には指導員の役割さえ不明確になり、しばしば全権としても利用された。

第3は、全権のように特定の一時的なキャンペーンの遂行を目的とせず、より広く農村統治を目的としてより長期的に農村に派遣するものであり、「配置替え」(перевоска)がこれである。それは、上から下へ、そして横へも人員を異動させた。

新経済政策を採択した第10回党大会や第11回、第12回党大会など主要な党会議ではコムニストの配置替えの意義と事実が指摘された。1924年には2月の中央委員会の決定によって3,000人以上のコムニストが農村に動員された。それ以外にも、県や郡の党委員会はくりかえしコムニストを農村に派遣した。1924年10月の中央委員会総会の決議も、「経験のある党の勢力が農村に不足しているために、不断に農村へコムニストを移動させることが要求されている」と認めた。

第12回党大会決議(それは1,000人以上のコムニストを派遣することになった)は、派遣される農村における活動を具体的に次のように列挙した。「細胞の組織者、人民裁判官、農村読書室管理人、協同組合指導者、郷執行委員会書記、教師、郵便局長、全ロシア農林労働組合下部細胞」がそれであった(КПСС(3):121)。このうち(おそらく細胞の組織者を除いて)すべてのポストは、給与の多寡に顕著な相違があったとはいえ、等しく有給であった。なお、郵便局が任地に挙がっているのは、そこが情報交通の中心であり、反ソ的情報を監視する有効な場だったからである。

上記の職の大部分は行政職であった。一例をあげよう。ニジニ・ノヴゴロド県ヴォフマ郷の党細胞では、郷執行委員会議長、人民裁判官、郷警察署長の「トロイカ」が常設の細胞ビュローを構成した。党歴をみると彼らはそれぞれ1918、1919、1921年以来の党员で、内戦期の価値観の持ち主であったことを推定させる。それ以外に、地元の農

民である党员候補2名がいた。「トロイカ」はいわゆる「他所者」であり、配置替えによって頻繁に入れ替わった(Никонов, Симонов:83)。

彼らのなかには、1920年代初頭の社会経済的な瓦解状況を背景にして、着任地において、農民に対する恣意的態度、賄賂、横領、職権濫用などの汚職、大酒など、地域の農民から見て目に余る所業にかかわることがあった。それは、1924年末からの農村党細胞の点検や、同時に推進された農村調査によって暴露された。

しかし他面では、彼らの多くは農村から離れようとしていた。キャンペーン的な動員がくりかえされたこと自体がその限界を示していた。たとえば1924年2月の中央委員会決定を実施したとき、ペンザ県委員会の指摘によれば、農村に動員されたコムニストの30%が「根を下ろした」にすぎず、残りは都市に戻ったか、不慣れた農村の生活に動揺していて使いものにならなかった。サラトフ県では、動員されたコムニストのうち農村に残るのは40%を超えないだろうと評価された(Мобилизация:78-83)。

農村に動員されたコムニストは、高位の役職につく場合を除けば、物質的に非常に困難な状況に置かれていた。その困難の形態はどれも本質的に同じであった。彼らは、農村で依拠すべき農業がなく、着任したのが末端の村細胞の書記であれば、その職はふつう無給であった。何らかの職(たとえば農村読書室の管理)から収入を得ても、住居と食費、それに家族への仕送りのあとには何も残らなかった。ヤロスラヴリ県の農村からのコムニストの手紙は全員の不満を代表している。「派遣された者の物質的条件はやりきれないほどひどい。そのために、全員が、働くかわりに振り切って離れ、逃げようと考えている」(Беднога.6/I-1926)。そして前述のように、少なからぬ部分が実際に逃亡した。

コムニストにとって、都市から農村に派遣されることは大きな災難であった。彼らは、罰せられて「流刑地」に送られることであると感じた。「懲

罰兵」(штрафные)という言葉が彼らに使われた。他方、農民は、別の地方から送られてくるコムニストを、そこで何か都合の悪いことを起こした人間ではないかと訝った。

1925年2月、スターリンに宛てた手紙のなかで、オデッサ管区の農民は書いた。農村に送られてくるのは「流刑囚」か、都市に不要な人物であり、「私は農村で、惨めで不憫な人々としばしば出会った。彼らは都市から派遣されたものだが、『ひ弱で』、農村は彼らを『こづいていじめている』のである」、と(Крестьянские истории: 121)。本質的に彼らは他所者であった。

1929年になっても状況は全くかわらなかった。都市のコムソモール員も農村を「流刑地」と見なしていた。そのアクチーフも例外ではなかった。1929年2月、西部州ロスラヴリ郡委員会は郷委員会書記として多くのアクチヴィストを農村に派遣することを計画したが、計画の3分の1を集めるのがやっとであった。拒否するものは、給料が安い、家族のことがある、徴兵前の軍事訓練を受けている、等々といった様々な口実を設けた(РГАСПИ. М-1/23/822/121 об.)。もともと1920年代前半には、農村に派遣される都市のコムソモール員は、実際に何らかの罪を犯した若者であった。

こうして、農村に派遣されたコムニストには都市へ逆流する傾向、本質的な都市志向が支配していた。農村に定着してそれを変革することにコムニストが本質的に消極的であったことは、1929年以降にもつづく基礎的な底流であった。このことは、同種の運動に一時的な高揚が存在する場合にも視角として保持しなければならない。

なお、補足的に、労働者による農村への援助の運動である「後援活動」^{シェフストヴォ}についても簡単にふれておこう。この活動は、レーニンの「日記の数ページ」(1922年)の発案になるもので、その参加者(シェフ)は、農村読書室やクラブ室などの文化的施設を建設、援助し、その他農村を訪れて様々な援助活動に従事した。しかし郡と地区で実施された調査は、労働者の後援活動に本質的な欠陥が

ともなっていたことを明らかにしている。

それは、経済的な再建という性格をもたず、大多数の場合、「偶然的、旅巡業的、表面的な」ものにとどまった¹⁰。1926-27年の冬におこなわれた郡、地区の党協議会では、多くの代議員によって、シェフが対象の村で全く働かず、農民におもねって「非常に多くの口先だけの約束をする」実情が語られた。約束は、実現されることのない無責任なものであった。大きな後援団体が存在するところでも、たとえ活動がおこなわれても、それは農民との会話と「無益な約束」の濫発に終わった。県党委員会は「この分野での活動の肯定的な事実希である」と認めた。この認識は、1926-1927年の多くの地方党会議に共通していた(Люттов: 183-184)。

後援活動は、当初、党細胞付属の後援委員会によって実施されていたが、その後、党の指導から離れて形式としては自発的な労働者の団体となった。しかし党や労働組合は後援活動に関心を失っており、それは「多くの自発的な団体と運命を共にした」。1928年には完全に凋落した。後援団体の加入メンバーは激減した。彼らは会費を支払わなくなり、後援団体員である自覚さえなかった。その活動内容は労働者にも農民にも知られなくなった(Френкель: 57-60)。

4. 「ブルジョアかぶれ」

事実上農業と結びついていない、極貧出身の農村コムニストは、体制内勢力として党と国家に強く依存していた。党員は党費を支払う義務があったが、コムニストは農村党細胞の書記となっても無給であり、有給の職は彼らの生存にとって必須であった。したがって、早くも党に加入するときに、彼らには有給の職への「下心」が「或る程度」みられる、と内密の文書は指摘した。1925年の中央委員会組織配員部の文書は、次のような状況を認めた。「失業から身を守るためにも、勤めにおいてより早く出世し、そこで確かな状態を確保す

る可能性を手に入れるためにも、そして何らかの大学か大学予備校へ学びに派遣してもらうためにも、党への志向が存在している」(РГАСПИ. 17/64/148/30)。

農民身分からの脱出がコムニストの側からの要求であったのにくわえて、それを強く促す党の側からの圧力があった。1923年5月にモロトフが州・県委員会に送った「ブルジョアかぶれ」に関する通達は、コムニストの農業が「勤労的経営」の限界を超えないよう、彼らに個別に任務、課題をあたえることによって党活動に強く引き入れ、必要な場合には、配置替えを適用することを要求した。これらの措置が効果的でない場合は、党からの除名など、決定的な措置を講じることになった(Известия ЦК: 81)。

配置替えによって党は農民党員を農業的に零落させようとし、その措置を蒙ったものは実際に農業から離れた。これによって党組織は、コムニストの党への恭順を確かめ、配置替えか除名かという「試練の措置」を彼に課したのである。

これは「脱農民化」の強制であり、農民労働そのものが「ブルジョア化」を引きおこす、あるいはひいては、農民の個人的な肉体労働が資本家的な関係を生み出す温床であると見なされていたことを意味する。「農民は最後の資本家的階級である」という1929年4月のスターリンの発言は偶然ではない(Как ломали НЭП: 470)¹¹。

「ブルジョアかぶれ」に対する党の警戒は、勤労にもとづく富という農民的な価値観がコムニストに定着することを決定的に妨げた。1925年にノヴォニコラエフスク県カインスク郡の2地区の党細胞を調査した結果は、コムニストの文盲や、政治的文盲に関する深刻な状況の他に、細胞が、富裕に暮らしているコムニストと、さらに「勤勉なムジーク」までを一般的にクラークと見なしていることを明らかにした。

勤労に対する認識に関連して、著しく重要な論点がこの調査に開示されている。弱体な経営をどのようにして助ければよいか、との調査委員会の

質問に答えて、地区委員会の指導員^{インストラクトル}はこう答えた。「クラークから余剰を没収し、貧農に分けあたえなければならない。それは国家に役立ち、国家は自分の資金を貧農にあたえなくてすむだろう」(Правда. 5/III-1925)。

これはいうまでもなく戦時共産主義期の「残滓」であるが、この思想の最大の強みは、富者を減ぼすことが国家と社会に有益であるというロジックの単純さにある。逆に、ネップが共産主義へと導く理由を、農村の政治的に文盲の、いかなるコムニストが理解しえたであろうか。第14回党大会において、シベリア地方委員会書記エス・コシオールは、ネップの理解における2つの偏向という当時の公式見解にふれて、それを次のように説明した。ネップを富農に有利にしようとする「いわゆるクラーク偏向」が一方にあり、他方には、これを受け入れがたいと反発して、中農までを考慮にいけないという偏向がある。コシオールは、前者は、「主として上から」、文筆家やインテリ上層のなかであらわれたものであり、これは党そのものには影響はあたえなかった。他方、後者は「下から」のもので、それは戦時共産主義の残滓のなかで育成された農村の党組織の根底にある。コシオールによれば、後者との闘争において党はもっとも力がなかった(XIV съезд: 311-312.)。

まもなく1928年以降には、農村コムニストの最大の課題は、農民から穀物をとることとなった。それが社会主義に前進することであった。思想のこの単純さが情け容赦のない態度と結合して、変革期のコムニスト独特の類型が復活し、再生産された。

勤労的な富の周辺には様々なあらわれがあり、それに対してコムニストは嫌疑をかけた。ブハーリンは1925年4月、モスクワの党アクチーフを前に語った。「もし農民がトタン葺きの屋根^{クリイシャ}をつくれば、次の日にはクラークといわれ、したがって彼はおしまいである。農民が機械^{クリイシカ}を買えば、『コムニストに見られないように』する。農業を技術的に改良したことは何か秘密のようなも

のにされる」(Правда. 24/IV-1925)。コムニストがクラークと見なす指標には「家のなかが清潔で、いい牝牛をもっている」というものさえあった(Большаков: 426)。

タタール共和国については、1920年代、30年代に富裕農の2階建ての建物が壊されたことが指摘されている(Червоная: 241)。そのために建築は全体として簡素化された。もし建築文化が富者によって担われるとすれば、それは進歩を止めた。タタール共和国以外で進歩の停止が起こらなかったという証拠はない。それどころか、集団化のときには、家が美しく、ベランダがあるために「クラーク」の烙印を押され、父がそれを壊したというヴァトカ農民の娘時代の回想が残されている。彼女の家族は平均的な農民であった(Бердинских: 322)。

スターリン時代の、明るいコルホーズ農村を描いた絵画のなかに、ベランダのある2階建ての家を見つけたとき、歴史家は、かつてそこに住んでいた「クラーク」の家族を重ね合わせるのである。

5. 職の独占

地元出身のコムニストも、党・ソヴェト機関によって配置替えて農村に派遣された者も、ともに有給の職を必要とした。しかし、1920年代の農村における社会的分業の展開は未発達で、適当な有給のポストは農村では著しく限られていた。都市工業の復興が十分でない条件の下で、それは農村過剰人口の主要な原因をなしていた。ところが、地元の農民からコムニストに経上がるものも、「共和国の様々な地方で、何らかの、大部分は貧農的な経営をもつ」コムニスト(Яковлев: 143)も、この少ない有給の職を求めて殺到することになった。権力を背にするコムニストはこうして農村において職の独占者となった。

1924年夏、若いメンシェヴィキの地下党員がロシアの7県8郡の農村を調査した。その調査結果は、われわれと同じ結論を導きだした。党細胞は

「郷のすべての社会的な役職を埋め、それによって生計を立て、徐々に農民から分離しながら勤め人の組織に転化しようとしている」、「共産党員には失業者がない」、と(Далин: 6)。農民のあいだでは、それは非常に目立った特徴であり、職と党員であることの同一性を意味する「コムニストとして勤める」(«служит в коммунистах»)等の表現が当時の農村で広く用いられていた。

コムニストが権力とむすびついていたために、前述のように、その職は行政職にもっとも向かいやすかった。しかし、社会主義を導くものとしてソヴェト権力の正嫡の地位を占めていた協同組合が彼らの垂涎の的となった。なぜならば、協同組合は何らかの経済活動と結びついており、財やカネが存在したからである。

農村の協同組合組織へのコムニストの深い関与は、農村の自発性と下からの発展を阻害した。「他所者の、失業した党員」が村にあらわれると、協同組合店舗の店員が首になり、失業した党員がその職に就く。協同組合はこれらのコムニストにとっては「社会保障局」であった。さらに協同組合には職以上のうまみがあった。汚職は誰もが知っていた。協同組合の資金や資産に対するコムニストの不正行為は、当時の風刺画の恰好のテーマであった。

1927年にトヴェーリ県の農民が『貧農』紙に書き送った手紙の一節は、コムニストと協同組合との深い結びつきと、民主主義の形骸化を指摘している(Беднота. 3/II-1927)。協同組合の党細胞は、管理部の選挙に先立って、その秘密会議で、誰を、どこへ選出するかをあらかじめ決定している。そのリストには、ほとんど全員が党員、なかには全くそのポストに不適任な人物も含まれている。農民は、それを何らかの方法で知って、不審に思う。「[選挙] 集会でわれわれがすることは何もないではないか」。集会では、うわさ通り、党員が手段を選ばず自分たちの候補者を通そうとする。

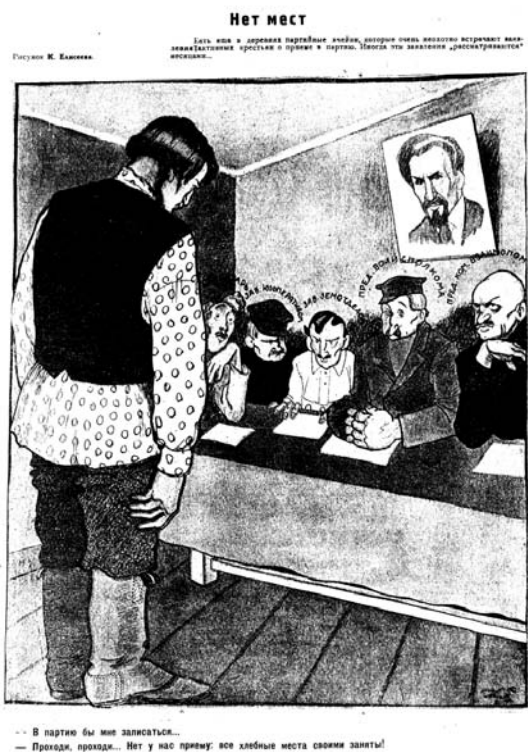
集会で農民が提案した別の候補者の件になると、集会の幹部会は沈黙し、耳を傾けない。沈黙

が功を奏さないと見るや、今度は反対しはじめる。それでも効果がなければ、その候補者の農民には別のポストが合っているといつては、そこへ回す提案を出す。集まった農民は、「党员には何でもできて、われわれには打つ手がない」と不満をこぼす。

党外の農民が長く或るポストについていると、彼もコムニストになった、と農民は考えた。「さもないとポストなどあたえられないから」。

手紙の筆者によれば、農民のなかには次のような印象が生まれていた。「党员とは、責任あるポスト、職に特別に予定された人々である。その権利は彼らにだけ属する。彼らは、定職と実入りのよい地位をみずからに保証するためにだけ党に加入する」。こうして彼は次のような命題に到達する。「党細胞と党员は、何か特別な身分である」。「党とは『新しい貴族』であり、特権を享受している」。

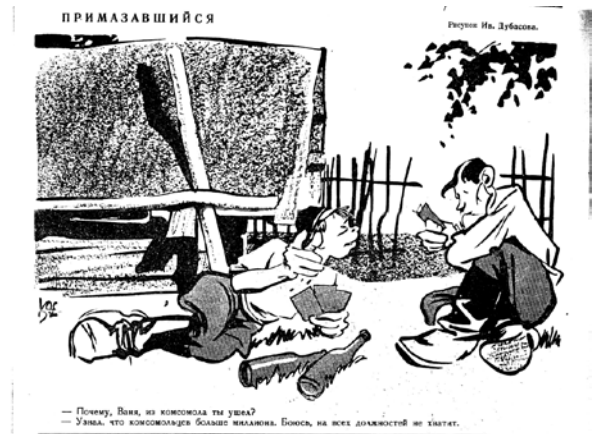
【画3】「ポストなし」もまた党と職との深い関



【画3】「ポストなし」

——党に入りたいんですが。
——いつて、いつて、採用はありません。実入りのいいポストは全部われわれだけで塞がっているの。

Лапоть. 1925. № 14 (май). С. 8.



【画4】「もぐり」

——どうしてコムソールをやめたんだ？
——コムソール員は100万人以上いるんだって。全員に職は無理だろう。

Лапоть. 1926. № 22 (сент.). С. 2.

係をあらわしている。キャプションでは、「アクティヴな農民の入党申請を非常に不快に受け止めている党細胞が、まだ農村にはある。ときにその申請は何か月も『検討中』として取り置かれている」と、当時の報道が要約されている。しかしこの画自体は、入党が阻止される原因が農村におけるコムニストによる職の独占にあると主張していた。

ちなみに面接官（職の独占者の象徴）は、左から、党細胞書記、協同組合主任、土地局主任、郷執行委員会議長、農民相互扶助委員会議長である。

職への要求は、コムニストだけではなく、農村のコムソールの若者においていっそうあからさまであった。彼らの「鞆」への希求、いいかえれば、都市、脱農民化（反農民）、権力への志向は時代の流れに棹さしていた¹²。【画4】は、その動きに乗り切れない若者のアモルフな欲求不満をうまく表現している。彼らがまもなく来る工業化の恩恵を蒙る層であったことは明確である。彼らは、農村に発生した伝統的な共同体農民との価値観の亀裂を典型的に体现していた。

6. 農民が見たコムニスト

ソ連中央執行委員会のメンバーに抜擢された非

党員農民、ミハイール・フォミンが1925年秋に経験した出来事は、権力者の立場へ移ったものに対する共同体農民の意識を示唆している（Беднога. 18/X-1925）。

彼は、リャザン県スコピン郡の郡教師会議を終えた教師グループと鉄道駅で出会った。彼らは、政府の高い地位についているフォミンをよく知っており、党は非党員を「脱落者（下級の人）」^{イズゴイ}にしているのではないかとフォミンに訊ねた。教師グループによれば、共産党とは、「権力を手中に握り、今やわれわれに命令を出している何か特権をもった人々の党」であった。さらに、教師グループは、フォミンに対して「あなたがコムニストに寝返ったというのは本当か」と尋ねた。フォミンはそれぞれに対して公式的な回答しか残していない。しかしフォミンに投げかけられた問いは、農民的な価値観を守ろうとしていた農民の疑問を代弁したものといえるであろう。

農民のなかのコムニズムについても何人かの同時代人が論じている。トヴェーリ県キムリイ郡ゴーリツィ郷の詳細な研究で著名なボリシャコフは、「息子も親父から分かれるのに、どうやってみんなをひとつの経営にまとめられるか」「モスクワでも党内で意見が分かれるのに、どうやってひとつになれるのか」等の農民の発言から、彼らはコムニズムを絶対的な、神聖なものと考えている、と捉えた。

現実のコムニストは、このように理想化されたコムニズムと対蹠的な位置において観察されていた。「何だ、あのコムニストは？ 偽物だ！ 大体みんな打算家で、自分のことだけに精を出している」。「大半のコムニストは行いがいいかげんで、サモゴン〔密造酒〕を飲んで、税を取り立てている」。こうして農民は、コムニストに対して厳しい態度をとるよう中央権力に求めた。自分なら、コムニストの数を各県あたり25人ほどに減らして、理想的な人々だけを残すのだが、と（Большаков: 423-424）。スメルドフも、先の大論文のなかで、「農村は、恒常的な法秩序の理想的な

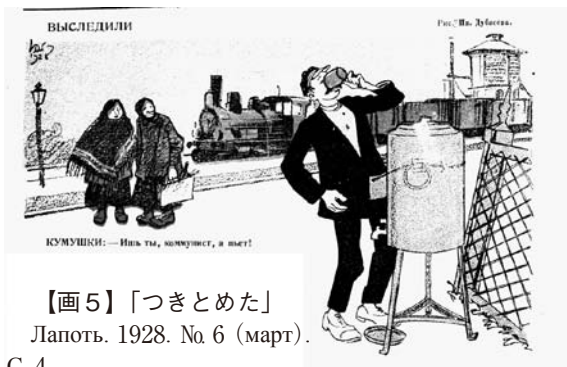
姿を〔コムニストに〕要求する」と書いた。

彼らは、コムニストを非難するためにコムニズムを理想化しているようにも見える。さらにコムニストとコムニズムとの関係は、中央と地方の関係に通じるものがある。農民の社会（世界）認識は、多くの場合、郷規模の広がりしかもたなかった。バザールや教会がある郷村（волостное село）を中心として、そこへ農民の基本的な交通手段である馬を使って1日で往復できる範囲がそれである。郷の外へ出たことのない多くの老人がいた（奥田 1972: 1-4）。また郷村にはまず間違いなく党細胞もあった。

ノヴゴロド県ヴァルダイ郡ガドィシ村を調査した民俗学者フェノーメノフは重要な観察を残した。「一般的にいて、村から遠く離れれば離れるほど農民の政治的表象は支離滅裂になった」。郡のソヴェトは他所事であり、全ロシア中央執行委員会について農民はほとんどいかなる表象ももっていない。「郷の境界を越えたすべての権力機関に対する関係は、『われわれは権力に反対ではない。権力は必要だ』という言葉に特徴づけられている」、と（Феноменов: 95）。

傍証としてもうひとつの例をあげよう。ジノヴィエフが第13回党大会（1924年5月）で引用したイルクーツクの党員の情報は、「一般的にいて農民が党と権力を承認しているのは、中央と県までだけ、あるいは郡までだけであり、自分の農村（деревня）においてではない」と指摘していた（XIII съезд: 96）。これは、経験的に見知っているコムニストを農民は信用していないという趣旨であり、この場合「自分の農村」には、より広く、郷までをふくめることができる。

【画5】「つきとめた」は、おそらく酔い覚めの渇きから水を飲んでいるコムニストを農婦が見つけたところを描いたものであるが、背景に鉄道の駅が用いられていることを自由に考えてみたい。郷内部の交通手段が馬（や徒歩）であったのに対して、都市と農村、農村と農村をより広い範囲で結びつける交通の手段は理想的には鉄道であっ



【画5】「つきとめた」
Лапоть. 1928. № 6 (март).
С. 4.

た。したがってその象徴は駅である。こうして鄉村や郡都に駅があれば、それはコムニストとも結びつきえた。

ちなみに、国内戦の時期であれば、駅は割当徴発を連想させることがあった。亡命した或る農村教師によれば、彼の村では、権力が主張しているプロレタリア独裁の「プロレタリア」という語を聞くと、農民は、「駅のプロレタリア」、すなわち権力が掌握している点と点を結ぶ鉄道の下部職員に具象化されていると感じた。「それは部分的に正しい。彼らは運輸機構に近く位置しているからである。実際、駅に住んで職員のサービスを使っている権力は、自分のために、農民からありとあらゆる徴発を不断におこなっており、それが農村をいかに憤慨させてきたか、想像できる！」(Крестьянская Россия: 185)。

「農民の支離滅裂な政治的表象」についてつづけよう。郷の内部にいて共同体のメンバーであるコムニストは地元の(местные)コムニストであり、それを越えたところから来たコムニストが「他所者」(пришлые люди)であった。「他所者」に対する共同体農民の反感は著しく、それは1920年代のソヴェト選挙キャンペーン、とりわけ1924～25年の選挙キャンペーンにおいても鮮明にあらわれた(奥田 2016: 62)。農民のこの意識は早くから際立った特性となっており、資料が非常に乏しい1923年選挙についてさえ、党中央委員会組織局の総括に簡潔に指摘されている。文書の最後には「地元の人間を通そうとする志向と、他所者(посторонние люди)を落選させること」

という志向が農民に見られると、記録が残されている(РГАСПИ. 17/11/256/4)。

しかしさきにフェノーメノフについて見たように、郷を超える漠とした権力(国家)に対しては、これを容認していた。ボリシャコーフはそれを次のように記した。「彼〔農民*〕は中央と地方の支配者をはっきりと区別しており、それらを相互に対立させている。『中央政府は完全な世界をつくり農業を発展させることを望んでいるが、地方ではしばしば間違ったことがおこなわれている』と」。したがって中央は、地方が間違った場合に訴えるべき正当な場所であった。共同体が費用を支弁し、その訴えを中央へ持参させる農民訴願者(ходоки)の慣行(【画6】『貧農』紙の挿絵——おそらく農民が描いた)が1920年代に強固に存在したことはそれを証明している。農民によれば、中央権力は正しいことを求めているが、郷権力はそれを求めていなかった(《Хочет ВЦИК, да не хочет ВИК》)(Большаков: 423)。

*ボリシャコーフの定義では、「農民」とは、ゴーツィ郷で「圧倒的な」中農を指している。



【画6】農民訴願者
Беднога. 20 марта 1926 г.

中央と地方に対する農民の意識の相違は数字としても把握されている。1925年に検閲を受けた農民の手紙を分析した研究によれば、その65%がソヴェト権力を受け入れていたにもかかわらず、ほとんどすべての農民（96%）が地方権力機関に不満を抱いていた（*Izmozik*: 288-289）。

郷内の地域の人とその外の「他所者」という把握は、認識の枠組みであって、受容か排斥かの農民の態度にそのまま対応するのではない。コムニストに対する評価はあくまでも彼の具体的な行動に依存していた。郷の外から来ても、道路を修理し、森林利用の問題を解決し、いつも柔和に農民の日常的な質問に答えてくれるコムニストは善であった。郷の生粋の農民出身者でも、逆であれば逆であった。しかしそれでも、「他所者」であることは農民によって警戒されるに十分な条件であり、好ましい「他所者」に対しては、「他所者だけれども（つまりわれわれの郷の者ではないけれども）……」 хотя и приезжий (то-есть не нашей волости) という風に彼らは考えるのである（Беднота. 28/X-1924）。

農民に聞こえてくる中央の言葉とは異なって、目前にしているコムニストのおこないは悪であるという農民の根強い観念は、実際に、その後の集団化の過程でモスクワによって最大限に利用されることになる。数年後、農民が集団化において激怒したこと（コルホーズへの加入を強制されたこと、村のよい土地をコルホーズが占拠したこと、教会の鐘を外したことなど）を、中央（スターリン）は、下部の活動家の誤りとして弾劾し、みずからの責任と切り離したのである。

その効果は絶大であった。1930年春、コルホーズ建設が農民の規範をいかに侵犯しているかを抗議して共同体が中央に派遣した訴願者の数は、このときソ連史上未曾有の大きさに達した（奥田 1990: 598-599）。

7. 乖 離

農村党細胞が、農業、農民から隔絶する強い傾向をもっていたことは、その集会の審議事項が農業、農村と関わりが少なかったことに明瞭にあらわれていた。1925年春夏の農村党細胞の全国調査によれば、入党や除名、党の組織問題、中央委員会の指令の審議、何らかのキャンペーン等々、党細胞自体に関わる問題の審議が全体の84%を占め、農民に直接関わる問題の審議は16%を占めるにすぎなかった。そればかりでなく後者からソヴェトの問題、協同組合の問題を除外して、土地整理、農業援助、土地改良など農業的な問題だけに限定すると、実に、わずか2%を占めるにすぎず、農村の党細胞は事実上、農民の焦眉の課題とは無縁のところ position していた（Митрофанов: 卷末 Приложение より算出）。

コムニストが農村の現実を知らないということとはたびたび指摘された（【画7】を参照）。逆に農業に打ち込みはじめると彼は党から離れた。この傾向は1920年代を通して基本的にはかわらなかった。キャンペーン以外でコムニストが村の集会（ス



Товарищи, должны мы, как местные члены, обсудить... В нашей деревне, оказывается, мужиков пороку... ГОЛОСА: Да ну! Откуда ты узнал? А вот, из газеты „Беднота“.

【画7】「事情通の活動家」

—諸君、地域の細胞として審議しなければならないことがある。われわれの村で農民が鞭で打たれたことが判明した。

—その通りだ。どこからそれを知った？

—『貧農』紙からだ。

Крокодил. 1928. № 39. (окт.). С. 6.

ホード)に参加すること自体がまれであった。

さらに【画7】のおちとは異なって、農村コムニストは新聞を読まなかった。これも彼らが戦時共産主義のなかに生きているという命題が意味する一部である。1925年のリャザン県の党機関誌から引用しよう。「われわれのコムニストは、大多数の場合、現在のモメント、国際、国内情勢、党とソヴェト権力の政策、政府のもっとも重要な施策等々に適時に通じていない。わが同志はあまり新聞を読まず、全く読まない者もいる。とくに読まないのが、『プラウダ』、『農民新聞』あるいは最後に『貧農』である」(Коммунист: 17-18)。

このことが、先進的な農民の文化レベルとの相違を際立たせているというのが、多くの調査の共通の結論であった。そのため、農村における私的商業の展開や、土地の賃借、バトラークの雇用の容認などの党の決定に農民が言及すると、コムニストは「ソヴェト権力がそんなことを許さない」と答え、今度は、農民が面と向かって、あなたがたコムニストの方が党を知らない、と呆れて語るという奇妙な会話となった(Коммунист: 17-18)。

総じて1920年代の後半の短い時期に大きな変化がおこることはありえない。集団化の前夜、1929年にいたっても、西シベリアにおける党細胞の点検の結果、「文字どおりすべての細胞において」大多数の農村コムニストが党の最重要の決定を知らない、という事実が明らかとなった(На ленинскому пути: 30)。

地方の党やソヴェトの会議では、農民生活と何の関係もない問題が話題となった。サラートフ県アトカルスク郡の例では、国際関係に関する報告はあまりに表面的で、彼らの無知をさらけだしていた。或るものは、事柄がヨーロッパでの出来事であったといい、別のものは東洋でのことであったといった。人物がカーゾンであったり、ウィルソンであったり、シャイデマンであったり……農民が聞きただすと、報告者自身が理解していないことがわかり、農民はコムニストへの信頼をなくした(РГАСПИ. 17/ 84/ 699/38)。

この種類の問題は実例に事欠かなかった。コムニストは、革命記念日に、全党の代表者を自認して、地域の問題を些事と見なして政治情勢を「高尚な文体」で語った。或るコムニストは、自慢げにプロレタリアートの「ゲゲモーニヤ」(ヘゲモニー)について語ったが、この言葉を何度も「イゲモーニア」と誤って発音した。農民は、この言葉が全く理解できなかった。コムニストは「われわれに税金を払わせようと、灼熱地獄のことをしゃべっているのだ」と農民は密かに語り合った(Ячейка: 83-84)。

表現が難解であることは、党と農民の関係を考えるうえで重要な問題である。それは、農民の上に立って指導しているという彼らの立場を農民に知らしめることであり、農民に対する権威的な態度の一部である。ボリシャコーフは、1927年2月のトヴェーリ県キムリイ郡ゴーリツィ郷の郷ソヴェト大会での出来事を記録しておきたいという気持ちを抑えることができなかった。

ソヴェト大会冒頭で国際、国内情勢について報告したのは郡委員会書記であった。書記は、報告のなかで、「分析」、「安定化」、「恒久的に」、「帝国主義」、「公理」、「ルンペン・プロレタリアート」、「アナーキズム」、「緩衝国家」、「重工業」、「搾取システム」^{ボトゴンナヤ}、「すべての道はローマに通じる」等々といった言葉をあやつった。

ところが、この最後のフレーズが事件をひきおこした。ゴーリツィの農民はしばしばキムリイへ往復していたが、途中の道路が大変な悪路で、それは農民にとって大問題であった。或る農民は、「公理」も「安定化」も「帝国主義」もそっちのけで、最後のフレーズに反応し、休憩時にボリシャコーフに聞きにきた。「道路がローマかどこかに通じるといっている。去年、キムリイまで道を通すと約束があったのに、これでは話が違う。ローマってのはどこだ、どこの郷だ」(Большаков: 433)。

ボリシャコーフは、農民の聴衆を前にしてそんな言葉を使ってはいけない、と報告直後に発言し

ていた。郷執行委員会議長が答えた。

「われわれは、報告者に、わかりやすく語らないように意図的にお願いしていたのです。去年ゴーリツィで、労働者に報告するように報告してくれ、あまり簡単でないようにしてくれ、と通告されたのです」。

ボリシャコフは、強い薬味をいれなければ農民が聞かないと考えるのは愚かな人間であると、印象を記している。しかしこの状況は、コムニストが真実を知っていて、それを無知な農民に押しつけるという無言の関係を反映していたと見なすべきであろう。

党中央委員会宣伝扇動部で講演した前述の人物は、次のように述べた。——1905-1906年の農村でエス・エルがどんな活動をしたか思いおこす必要がある。彼らは、わかりやすいビラとパンフレットを書いた。後者は数十頁からなるものであっても、ひとつの外国語もなかった、と (ГАРФ. Р-1235/103/84/53)。

犁をもって働くことをせず給料を受けとっているコムニストに対してボリシャコフは、農民に尊敬されるコムニストであってほしい、と昂ぶった気持ちで次のように書いた。「私は完全に確信している、全ゴーリツィ郷の細胞のうち、たったひとりのコムニストでもいいから自分の経営を然るべき水準まで高めたならば、郷だけでなくその境界を超えたところでも、すぐに知られるだろうに、と。そうすればコムニスト全員も必要な威信を手に入れるだろうし、細胞もまた郷の世論の指導者になるだろうに」 (Большаков: 327-328)。これは、疑う余地なく彼の1郷の詳細な観察と研究の結論であった。

8. 展 望

農村からのコムニストの隔絶的な状況、強権的な支配の構造に根底から変化をもたらしそうとしたのが、1924年10月の中央委員会総会が宣言した「ソヴェト活発化」であった。それは、地方ソヴェ

トへの非党員農民の下からの参加を促すものであった。まもなく年末から翌年にかけて、コムニストによる農村支配を急いだ1924年の選挙結果は破棄され、農民の候補者が広く選出される道が開かれた。【画1】にすでに表現されているように、農民に強権をもって臨んできた地方の指導者に対して、党は弾圧でさえ辞さなかった。

自治、勤労的富といった農民的な価値が復活した。少なくとも当時はそう見えた。カーニン、農業人民委員部のア・ペ・スミルノフ、やや遅れてブハーリンは本気だったからである。1925年春までには、農民の様々な私的な経済活動に対して大幅な特恵があたえられ、政治の領域でも、選挙人の資格に対する制限が大きく緩められた。農村コムニストは、農業を模範的におこなって農民から信望をえられるタイプのそれが理想とされるようになった。アメリカで共産主義ロシアを見守っていた研究者のなかには、小規模な生産（農民や農民の工業）の擁護がはじまったことに率直な驚きの念を表明するものさえあらわれた (奥田 1972: 114-115)。



【画8】「怯えたカラス」

——用心しろよ、新しいスカーフをつけて外へ出るんじゃないぞ！たちまち儂がクラークにされるんだからな。

Медведь. Ишим, 1925. № 9 (1 мая.)

西シベリアの小都市イシムで発行された雑誌『熊』には、若き風刺画家カ・エス・エリセエフが作品を送っている。【画8】「怯えたカラ

ス」*がそれである。残念ながら、印刷も紙質も非常に悪い。そこでは、夫（桶を製作している農民手工業者）が、鏡のかけらに自分の顔を映している妻をたしなめている。キャプションには、「勤勉な農民」をクラークと混同してはならないという時代のスローガンが説明されていた。この画は、新しい時代のはじまりを祝うのではなく、これまでの時期がいかに農民を萎縮させてきたかを示していた。

*「怯えたカラスは藪をも怖がる」の諺から。

しかし、農民の発言力を高めようとするこのような動きは、このときまでに下部のコムニストのなかに否定的な空気（自失、不安、不満、抵抗）を明瞭に出現させていた。下部のコムニストのなかにわきおこった動揺を示すためにヴォローネジ県の1郡から代表的な例をとろう。

下部の活動家にとって、農村政策の新コースは全く予期しないものであった。郡〔党〕協議会で発言した同志は、この転換を、農村コムニストの頭上にくわえられた突然の一撃にたとえた。この予期せぬ政策の転換は下部組織の茫然自失を引き起こした。多くのコムニストは、新しい政策をクラークをめざす政策と見なし、新コースは党をソヴェトの指導から遠ざけるものだとして理解した（*Розум*: 59）。

地方からの同様の多くの情報を『ブラウダ』紙は、次のように総括した。「本質的には『クラークの危険』にではなく、農民の増大する活発さに直面して、わが農村細胞は途方に暮れた」、と（*Правда*. 5/VI-1925）。この動揺は、とりわけ、農業から離れて給与に依拠していたコムニストを捉えた。彼らは、協同組合の職員や村ソヴェト議長など有給の職を党外の農民に奪われると危機感を感じたからである。

地方党組織の狼狽と意気消沈はモスクワ中央に強い警戒感を与えた。ブハーリンはそれを、1921年の新経済政策への移行の時期と同様の「党の危機」、党細胞の解体状況と特徴づけた（XIV конференция: 189）。

スターリンを中心とする指導部は、新しい方針を進めながらも、同時に別の方向性、すなわち階級的な観点を探っていた。腹心のモロトフは、はやくも1925年秋、中央委員会10月総会において次のように論じた。これまで農民（「農村の社会的上層」）を「活発化」させたがゆえに失ったものがあり、これを取り返すためには、貧農を組織し、中農の先頭に立ち、クラークを孤立させなければならない、と。その具体的な政策は、ソヴェト選挙に際して貧農集会を組織すること、村、郷（地区）のレベルにいくらかでも恒常的な貧農グループを形成することであった（РГАСПИ. 17/2/197/57 о6.; КПСС (3): 415）。いうまでもなくこの運動はコムニストが主導するのである。

この決定はこの年すぐに本格的に着手することはできなかった。しかし1926-1927年には様々な局面で具体化され強化された。階級的観点が前面に打ちだされ、貧農の役割が強調されるのと軌を一にして、1926-1927年には、勤労にもとづく富、したがって富裕な先進農に対する否定的評価が定着していった。社会発展の動因としての階級闘争を農村に焚きつけ深めるというスターリン指導部の意図は1920年代末へ向けて年ごとに強められた。

1925年12月の第14回党大会において、スターリンは、ネップの拡大に反対であると公言し、スターリンは、「茫然自失」とは正反対のコムニストの像を示した。

党はどちらをより多くやろうとしているか——クラークを裸にすることか、それとも、そうしないで中農との同盟に進むことか、という質問をコムニストに出したならば、私は、100人のコムニストのうちの99人までが、クラークを叩け、というスローガンに対して、党はもっとも多く用意ができていると答えるだろうと思う。ちょっとやらせてみたまえ——そうすれば一瞬にしてクラークを丸裸にするだろう（*Сталин* (7): 337）。

もちろんこのコムニストの像は、「茫然自失」

のコミニストの像と全く矛盾しない。それは、「茫然自失」の背後にあった「クラーク清算」への強い方向性を示しているのである。このスターリンの発言は警告であったが、一種の予言的な性格をもっていた。実際、1年後のソヴェト選挙キャンペーンにおいて、農村の党細胞はそれまでにない数の農民から選挙権を剥奪した。1927年2月中央委員会総会において、この事実を評してロベルト・エイハは、スターリンの党大会での予言が的中したと述べた（РГАСПИ. 17/2/276(3)/18 об.）。

この選挙のあと「茫然自失」の終わりが語られた。タンボフ県の1927年5月号の党機関誌は、それは前年でさえ見られたがその年の選挙ではほとんど見られなかったと指摘した。12月の第15回党大会において、エス・コシオールはスターリンの政治報告につづく組織報告のなかで、ソヴェト活発化の政策がひきおこした党細胞の「茫然自失と分散化」はいまや「跡形も残っていない」とその完全な消滅を宣言した（XV съезд: 95）。その後まもなくして、穀物調達の最前線へは党活動家が大量に投入され、穀物を供出しないうちに農民に刑法が適用されはじめることになる。

【注】

- 1 本稿に関連する報告を、早稲田大学ロシア研究所（所長・長興進教授）において、2014年10月4日に「風刺画に見るロシア農民の世界（1920年代～1930年代初頭）」と題しておこなう機会をえた。風刺画を利用した筆者の文章として他に「クラーク」に関するものがある（Okuda 2015: 26-33）。
- 2 以下、コミニストはポリシェヴィキ党員および候補の意味で用いられる。
- 3 もっともヤロスラフスキーは、戦時共産主義期の極端に困難な情勢のなかで自殺した同志も非常に多く、それは数えられていないだけであると付言した。
- 4 他にヴァレンチーノフは、その友人ユ・ステクローフ（『イズヴェスチヤ』紙編集部）との会話にもふれている。後者によれば、レーニンのスローガン「商業を学べ」に対して、イ・ヴァレイキス（当時、中央委員会ビュロー）がマルクス主義の原理原則からの逸脱を指摘すると、レーニンは、若僧が釈迦に説法をするのか、と激怒した（Валентинов: 30）。
- 5 なお筆者のこの主張は、ネップへの移行後にレーニンは生産物交換という古くさい理論を捨てたというエ・ゲンキナ（Генкина: 156）と反対になっている。本稿では省略するが、商品交換の観点が維持されていたことを示す証拠は他にもある。同じく本稿では立ち入らないが、この商品交換、生産物交換という単純化された将来社会のイメージは、レーニンだけではなく、スターリン、トロツキー、ブハーリンによっても等しく共有されていた。
- 6 なお、商品交換に関する専門的な研究として、（梶川 1997: 233-247, 418-426）がある。また（Дмитренко: 55-57, 76-79, 116-122）は示唆に富む。
- 6 これは、第10回全ロシア党協議会（1921年5月）の演説中の一節である。このかなり大きな部分がСочинения 第4版にいたるまでなく、したがって第4版の邦訳である大月版『レーニン全集』にもない。第3版が示しているように、第4版での、同協議会におけるレーニンの発言は、公刊された『ビュレチエニ』を転載したものであり、第5版では、速記録にもとづいて新しく追加がおこなわれたものと見られる。読者に注意と注目を促しておく。
- 7 戦時共産主義期とネップへの移行期の実態については、アルヒーフ資料を駆使した梶川伸一教授による研究があるので参照せよ（梶川 1998; 梶川 2004）。
- 8 スメルドフは、同じ1924年に、勤労によって経営を改良して豊かになった農民を「クラーク」として敵視するべきではないとし、『貧農』紙上で「誰をクラークと、誰を勤労者と見なすべきか」という長期の討論の端緒をつくった人物である。この討論について（Okuda 2015: 27; 奥田 2017: 5）を参照。なお彼は、1930年にオ・ゲ・ペ・ウによって反革命罪で逮捕された。
- 9 さらに、農村通信員については（Асаока: 111-123）の他、浅岡善治氏の一連の詳細な研究を参照。
- 9 1929-1930年の全権について、簡潔には（溪内: 258-269）を参照。
- 10 労働者後援活動の担い手（シェフ）と指導員の活動には全く同じ「定式化」が存在している。前者については「来た、たくさん話した、いなくなった」（Френкель: 63-64）、後者については「来た、書類を見た、いなくなった」（Любимов: 31）というのがそれである。全権も同様であったことはいうまでもない。
- 11 この命題は、公表されたスターリンの著作集では「個人農は最後の資本家的階級である」と修正された（Сталин (12): 40）。
- 12 農村のコムソモール員に関する詳細は、（奥田 2012: 208-218）を参照。

<引用文献>

日刊紙 Правда, Беднота（日月年の順に示す）。

アルヒーフ資料 РГАСПИ, ГАРФ（Фонд/Опись/Дело/Лист の順に示す）。

- Асаока Дзэндзи*. Крестьянская печать и селькоровское движение // XX век и сельская Россия. Токио, 2005;
- А. С.* Состояние инструкторского аппарата исполкомов // Власть советов. 1928. № 6.
- Бердинских В.* Крестьянская цивилизация. М., 2001.
- Большаков А. М.* Деревня. 1917-1927. М., 1927.
- Валентинов Н.* Новая экономическая политика и кризис партии после смерти Ленина. Стэнфорд, 1971.
- Генкина Э. Б.* Государственная деятельность В. И. Ленина 1921-1923 гг. М., 1969.
- Далин Д.* Деревня // Социалистический вестник. Берлин, 1924. № 24.
- Дмитренко В. П.* Советская экономическая политика в первые годы пролетарской диктатуры. М., 1986.
- Известия ЦК РКП (б). 1923. № 6.
- Из истории земли Томской. 1917-1921. Сб. документов и материалов. Томск, 1997.
- Как ломали НЭП. Т. 4. М., 2000.
- Климин И. И.* Российское крестьянство в годы новой экономической политики (1921-1927). Часть 2. СПб., 2007.
- Коммунист. Рязань, 1925. № 5 (июнь).
- КПСС в резолюциях. Изд. 9-ое. Т. 2. М., 1983; Т. 3. М., 1984.
- Крестьянская Россия. V-VI. Сб. статей. Прага, 1923.
- Крестьянское восстание в Тамбовской губернии в 1919-1921 гг. Тамбов, 1994.
- Крестьянские истории. Российская деревня 1920-х годов в письмах и документах. М., 2001.
- Ленин В. И.* Полное собрание сочинений. Т. 43. М., 1970; Т. 44. М., 1970.
- Любимов М.* Оживление работы советов и советская общественность в деревне. М., 1925.
- Люттов Лев.* Власть и общество в годы НЭПа (1922-1929) через призму настроений провинции. Ульяновск, 2010.
- Митрофанов А. Х.* Деревенские организации РКП (б) и осуществление ими новых задач и методов работы в деревне по материалам КК РКП (б). М., 1925.
- Многоукладная аграрная экономика и российская деревня (середина 80-х – 90-е годы XX столетия). М., 2001.
- Мобилизация 3000 коммунистов на работу в деревню (1924 г.) // Исторический архив. 1959. № 1.
- М. Х.* Некоторые итоги выполнения постановления октябрьской пленума ЦК РКП (б) о работе в деревне // На аграрном фронте. 1925. № 5-6.
- Мякотин А.* Кризис сельских ячеек РКП (б) – ВКП (б) // Самарский земский сборник. 2005. № 4.
- На ленинском пути. Новосибирск. 1929. № 18.
- Никонов Д., Симонов Н.* Две волости. М.-Л., 1926.
- Никулин В. В.* Переход к НЭПу и настроения партийных масс // Общественно-политическая жизнь Российской провинции. XX век. Вып. II. Тамбов, 1996.
- Окуда Хироши.* О понятии «кулак» в советской деревне 1920-х гг. // История в подробностях. 2015. № 3.
- Партийная этика. М., 1989.
- XV съезд ВКП (б). Стен. отчет. М.-Л., 1928.
- Розит Д. П.* Проверка работы низового аппарата в деревне. М., 1926.
- Сапунов А.* Состояние низового советского аппарата в деревне // Советское строительство. 1929. № 5.
- Сталин И.* Сочинения. Т. 7.; Т.12. М., 1947.
- «Совершенно секретно»: Лубянка-Сталину о положении в стране. Т. 1. Ч. 1. М., 2001.
- XIII съезд РКП (б). Стен. отчет. М., 1963.
- Феноменов М. Я.* Современная деревня. Ч. 2. Л.-М., 1925.
- Френкель С.* Перед подъемом рабочего шефства над деревней // Советское строительство. 1929. № 2.
- Червоная С. М.* Искусство Татарии. М., 1987.
- XIV конференция РКП (б). Стен. отчет. М., 1925.
- XIV съезд ВКП (б). Стен. отчет. М.-Л., 1926.
- Яковлев Я.* Наша деревня. Изд. 4-ое. М., 1925.
- Ячейка и советы в деревне. М.-Л., 1925.
- Izmolik V. S.* Voices from the Twenties: Private Correspondents, Intercepted by the OGPU // The Russian Review. Vol. 55. April 1996.
- 奥田央『ソヴェト経済政策史——市場と営業』、1972年。
- 奥田央『コルホーズの成立過程——ロシアにおける共同体の終焉』、1990年。
- 奥田央「犁から靴へ——脱農民化過程における農村のコムニストとコムソモール員」、野部公一・崔在東編『20世紀ロシアの農民世界』、2012年。
- 奥田央「1920年代ロシア農村の社会政治的構造（2・完）」、『経済学論集』（東京大学）第80巻第3・4号、2016年。
- 奥田央「『クラーク』と『勤勉な農民』——農村にネップはあったか」、『ロシア史研究』第100号、2017年。
- 梶川伸一『飢餓の革命——ロシア十月革命と農民』、1997年。
- 梶川伸一『ボリシェヴィキ権力とロシア農民——戦時共産主義下の農村』、1998年。
- 梶川伸一『幻想の革命——十月革命からネップへ』、2004年。
- 溪内謙『現代社会主義の省察』、1978年。
- レーニン ヴェ・イ『レーニン全集』、第33巻、大月書店、1959年。

